授業方法について，独自に工夫している点と，アンケート結果を受けての改善点【人文社会学系】
講義では、自作動画を見せることがある。演習では、第一班の事前指導をするものがある。 回答人数が少なくなったので、全体としてどうなのか把握しづらいが、こんなものだと思う。まずまずで、このままいきたい。
遠隔授業では、「授業者の顔は見えないまでも、声だけは届けたい」「テキストと音声を通して、『ラジオ講座』のような授業が展開したい」と考え、それを行ってきました。録音が聞きづらい等があれば、学生のみなさんに申し訳なく思います。また、遠隔授業について「授業資料を何度も見直すことが出来る」という意見をいただきましたが、その内容については「身になっているか分からない」というコメントをいただきました。内容が盛りだくさんであった回や、実際の授業場面がイメージしづらく具体性の欠ける回があったことが、その原因かと考えます。対面授業時に演習を通して復習をするという授業形態にあぐらをかいていたのかもしれないと思いました。ご指摘をありがたく思います。 指導法という科目の性格上、「場面指導」や「模擬授業」を行う必要がありました。 しかし、本学は指導法の履修学生が多いことから、一人一人に十分な模擬授業を行ってもらう時間がありません。 そこで、iPadに「場面指導」や「模擬授業」を録画してもらうという方法を考えました。 また、今後学校現場では、教師も子供もPCやタブレットを使用する機会が増えることや、教師がデジタル教材を使用して授業を行う機会が増えることが考えられます。そこで、iPadを活用することで履修者全員に小学校外国語のデジタル教材にふれて欲しいと考えました。 本科目については、授業者である私自身、常にこういった考えをもって取り組んでいますが、学生のみなさんにとってはどのように受け取っていただけたかは分かりませんし、まだまだ改善の余地はありますが、ほぼ、計画通りできたのではないかと思っています。 指導方法を知り、指導技術を高めることを目的とした授業であったため、（理論的な）知識の理解を深めるという内容の授業ではなかったことから、知的好奇心をくすぐるような時間とはならなかったのではないかと思います。その点、満足できない学生さんがいましたら、申し訳なく思います。 小学校における「これからの外国語の授業」を経験することで、授業のイメージをつかんでくれることができればよかった、そう思います。 ありがとうございました。
授業アンケートをありがとうございました。 遠隔授業に関わり、 とりわけ人数の多い授業では、教室内で一斉授業ができなかったクラスにおいて、学生からの、対面授業であれば、可能であったことについての指摘を、真摯に受け止めたいと思います。 専門科目については、学生から概ね授業での学びが得られたこと分かり、ほっといたしました。 コロナ禍に鑑み、対面授業とのギャップがうまれたことを、反省して、次に生かしたいと思います。
専攻科目 受講生6名中の2名のみの回答であったが、2名とも問1，2ともに「ややそう思う」とのことである。少人数での授業のため、半分以上は演習形式を取り入れ、発表と質疑応答の機会を一人に2回ずつ与えた。特に初習得外国語の特徴を紹介する発表では、その言語を知らない人に理解させるための工夫を考えるいい機会になったと思う。また、授業のおよそ3分の1は、ロシア語の文字と発音、およびごく初歩の文法事項の学習に当てたが、これは未知の文字に遭遇する日本語学習者の心情を理解することにつながると考える。
授業中に学生の主体的な活動を喚起するようにしているが、学びを深めるためには、授業外での学びについても示唆するようにしたい。どこまで自学自習を深められるかが大学時代の学びの質を左右すると考える。
独自だと言えるような工夫は特にないが、旧来の一方的な講義はよろしくないと承知しているので、講義であっても学生同士で考えたことを話し合わせるとか、想定している授業内容を薄めてでも学生の理解度を確認しながらペースを落とすといったことはしているが、どなたでもなさっていることと思う。演習では受講者が少なければ資料の扱い方から教えたいが、演習というには多すぎる受講者数でもあり、現実的には難しい。高校までに身につけている読解力に個人差がありすぎるため、習熟度別に対応したいが方策が見当たらない。

アンケートの対象となった授業は2つで、いずれも対面式で実施した。授業Aは教養の授業で、問1は「強くそう思う」が18%、「ややそう思う」が47%、問2は同じく24%、35%であった。授業Bは専門の授業で、問1が「強くそう思う」17%、「ややそう思う」83%であり、問2が同じく17%、83%であった（回答数は少なかった）。いずれも配付資料と板書を組み合わせるオーソドックスなスタイルで進めていた。授業Aはリテラシーの授業であり、討論や発表を織り交ぜており、積極的に参加した学生がいた一方で、あまり積極的でない学生もいた。今後は、知識の伝達を充実させる一方で、論文の調査や読解など、より学生に「考える」「調査する」機会を増やしていきたいと考える。
授業方法について，独自に工夫されている点：まなびネットを利用したことによって、学生一人ひとりの課題をもれなくチェック、フィードバックできる点である。アンケート結果を受けての改善点：これから学生たちが間違いやすい問題をまとめ、次の授業の冒頭で詳しく解説していく点である。
多種類の専門授業に対するアンケート結果を一括することは難しいが、どの授業も、おおむね私の授業内容には満足している一方で、自分自身で動いたり、調べたりという行為にまでは動かせていないようなので、そういった自主・自立性をはぐくめるような言葉がけがあってもいいかもしれない。
演習形式の授業では、教員が発表担当者と事前に十分に打ち合わせを行い、なぜその課題を取り上げるのか、そのことを理解することにどのような意味があるのかについて、十分な理解が及んでから臨ませることを心掛けている。他の受講者にも能動的に関わらせるため、受講者相互で相談、整理を行う時間を設け、様々なレベルの議論があっていいことを繰り返し伝えている。それらにより明らかに授業の活性化につながっている実感がある。講義形式の授業では関心を持ちにくい受講者がいることがアンケートの結果からうかがえる。それに対しては、講義が一方向性にならないよう、内容理解につながる問いを用意することで、受講者自身、能動的に疑念を解消したくなるような機会・動機を作る工夫を試みたい。
学部3年生を対象とした教育実習後に開講される授業であることを踏まえて、教育実習での反省点を生かした教材研究と授業づくりに取り組んだ。弁護士や税務署職員、選挙管理委員会の職員の方々と協働しながら、専門家からの助言を生かした社会科の授業づくりを行った。アンケートの結果を受けての改善点は、授業づくりを通して、どのような力を身に付けたいのか、受講生一人一人が自覚化して、それを達成できるような授業目標の設定と評価方法について改善したい。
後期のF科目の授業は、特にはじめの発音方法の習得に当たっては、口のかたちが見えることと実際に教員も学生も発話してみることが欠かせない。マスクも着用できないため、対面ではリスクが高すぎるため、本年度も学生から同意を得た上で、双方向の遠隔授業をおこなった。ここでの工夫は昨年度のアンケートに記したと思うので贅言しない。本年度後期は、感染状況の変化が大きかったため、途中で人数を制限した対面に切り替えてしばらく実施し、最後の段階でまたオンラインに戻すということもあった。コロコロ変わるのはどうかと思ったが、アンケートを見る限りは、むしろこまめな対応に安心感を感じたようである。ただ、感染リスクに対する感覚は学生の間でもかなり差があり、また対面授業とオンライン授業どちらを好むのかも違いがあるので、教員に選択権がある場合、どの形態をとっても不満がでる気がする。オンライン授業については、こちらも模索してやっていることが多く、そのぶん常に要望を（いろいろな窓口を用意して）受け付けていた。アンケートの意見の中には、今言われてもどうしようもないが、当時に申し出ていれば対応できることが複数含まれていたことが気になった。
独自に工夫している点：特段変わった授業を実施しているわけではない。私の担当科目は哲学だが、私自身が受けてきたような授業を実施している。奇を衒うようなことはなく、哲学教育の伝統に従ったオーソドックスな方法と内容である。アンケート結果を受けての改善点：私の担当科目専攻科目（1）については受講者26人に対し回答者6人、専攻科目（1）（2）については受講者8名に対し回答者1名で、参考とするに足りない回答者数である。よって本設問に対しては「特になし」と答えざるをえない。
対面授業では、できるだけ学生参加型にし、学生が主体的に活動できるようにしています。愛教大のメールアドレスでの送受信に不具合があるため、学生との連絡はまなびネットでするようにしています。

自身が担当した専攻科目（1）と専攻科目（2）について。専攻科目（1）は、2020年度に始めた授業で、今年度（2021年度）が2年目であった。異文化コミュニケーションを扱った（定評のある）英語教材を使った。半期15回の授業には分量は少なめなので、こちらで用意した材料も用いること（独自に工夫している点）ができ、内容も大変面白く、結果として適切な教科書であった。この授業も2021年度で終わってしまったのは残念なことであった。専攻科目（2）は、昨年度（2020年度）は割とかなりくだけた教科書を使ったが、今年度（2021年度）は、以前使っていた、少々盛りだくさんで難しめの教科書を使った。15回の授業で、何度か試験を入れ、自分独自の材料も盛り込んだので、結果的にすべての学習項目を消化できなかった。いくつか取捨選択をすることになったが、それでも、1年次の授業で英語音声学をかなり包括的に学ぶことができる内容なので、学生も満足できると考える。次年度は、最初から学習項目を選択をした上での授業運営を目指したい。 改善項目としては、学生の意見としてあった「声に出してペアで練習すること」も、ぜひ盛り込みたい。そのためにも、学ぶ項目を厳選する必要がある。

なるべく、学生に考えてもらうことに努めている。

コロナ禍による影響が大きかったことです。学生の濃厚接触等の連絡により、教室の狭さを考えると、対面で行うことが難しいことが急に生じたりして、こちらもかなり悩み、授業形式を臨機応変に変えたこともありました。授業については、遠隔の場合は、事前にスライドを用意し、そのスライドを視聴すれば、課題については問題がないと思われましたが、講義を視聴しない、もしくは曖昧な視聴の仕方でいい加減なレポートを提出してくる学生もいたのが残念でした。複数の学生がほぼ同じようなレポートもあり呆れましたし、質問も的外れな場合には、回答は敢えてしませんでした。M1の授業は、専門が異なりすぎる学生を一緒に授業することは難しいと思いました。理科と幼児教育では、お互いの専門に寄り添った授業を行いたいのですが、その説明をしたにも拘わらず、学生のコメントには全く理解されていない書き方になっていることが残念でした。そもそも、講義を全く無視して（視聴していなくて）中学校の前倒しで授業を行って平気な学生には、厳しいことも言いました。

全体として肯定的な回答を受け、教員として非常に嬉しく報われた思いでいる。自由記述の設問では、授業内容や解説資料、またフィードバックコメントが良かったとの感想が寄せられた。本科目は「まなびネット」を利用したオンデマンド型の遠隔授業であったが、その特性を生かして毎回、「解説」を読んだ後に復習課題として自分の発話を録音した音声ファイルを提出させ、それをもとに「フィードバックコメント」欄で発音や文法、語彙の個別指導をおこなった。教員側にとっては大変時間と労力の要る作業ではあったが、一斉対面授業ではあまりできなかったことであり、履修者に対して遠隔ならではの有益な学習機会を提供できたのではないかと思っている。今後の課題は、（アンケート上には表れていないが）オンデマンド型の遠隔授業における履修者の学習コンテンツの「選り好み」を、いかになくすかという点である。遠隔授業は、履修者が好きな時間に自由な進度で学習できるのがメリットであるが、その反面、対面授業のような強制力がないため、例えば復習課題だけを提出し、解説資料を読まなかったり予習課題を提出しなかったりして、単位を落としてしまうケースが発生する。対面授業のように、解説資料を受講すれば復習課題が開き、復習課題を終えれば予習課題に進める、というような機能が「まなびネット」にあれば、ぜひその利用を検討したい。

〈工夫〉　＊M1科目とS2科目〇1コマ約50人の学生をA・Bの2グループに分け、遠隔授業(学習指導案の作成)と対面授業(模擬授業による授業実践と振り返り)を隔週で交互に行ったこと　(例)ｸﾞﾙｰﾌﾟAの遠隔週は、ｸﾞﾙｰﾌﾟBは対面週。翌週は逆〇全員が教材研究に基づいて、前週に学習指導案を作成。次週の模擬授業により追体験し、振り返りを行った〇遠隔授業により「まなびネット」に提出された指導案やレポートは、対面授業日前までに全員にコメントを返した⇒アンケート結果によれば、学生の意欲に繋がったようである〇対面授業の際、遠隔授業で提出された指導案やレポートの中から、工夫された2～3人のものを印刷・配付した⇒さまざまな気づきに繋がったようである〈改善点〉〇模擬授業は、40分程度を設定し、学生による振り返りや指導等を合わせて、90分1コマとしていた。しかし、模擬授業を多くの学生が経験したいとの意見もあり、1回の模擬授業を展開部のみの20～30分程度にし、1コマで2つの模擬授業を行うことも考えたい。〇教材の捉え方や教材研究の仕方等も押さえ、より実践的な授業を計画したい

授業前に、受講生と打合せを行っている。授業で示した資料の活用が不十分であるため、活用しやすいよう改善を行いたい。

令和3年度の授業評価アンケート集計結果をもとに、令和4年度の授業について改善点を、以下に箇条書きにて報告します。①4コマ社会科教育関係の授業を担当しましたが、どの授業についても回答学生の8割を超える学生が、大変役にたった」「おおむね役に立った」と応えているので、内容としてはおおむねよかったのだろうと判断しています。②「ライブで遠隔のPCを通して授業を受けたかった」「物足りなかった」という意見が自由記述にありました。ゼミなどではそのような方法が有効でしょうが、50人から60人以上の授業においてライブの授業がPCを通して有効かどうか分かりません。PCを通したライブ授業は、技術的には可能でしょうが、その分学生に時間を縛る事になり「自分のペースで学修できた」というオンデマンドの良い点をなくすことにつながります。一長一短があると考えます。③「スライドショーのまま送っていましたが、容量が大きすぎて、見るのが大変だった」という苦情めいた自由記述がありました。「パワーポイントのファイルとして送ってほしい」という要望でした。ICT基盤センターに相談して、令和4年度の前期後半7回分の遠隔授業では、その要望に応えたいと考えています。今現在は、その区別が分かりませんが、聞いて対応するように努めます。

授業で扱った内容を実際の日本語教育の場にいかに結び付けて考えることができるかを最も重要視している。この点については、もっと様々な方法を試みていくべきであると感じている。
ペア・グループによる対話型授業の充実
独自に工夫されている点：①発音指導やグループでの会話練習などで多様な指導方法で学生に主体的に参加してもらうこと。②隔週の小テストで学習効果を確認すること。アンケート結果を受けての改善点：①発音指導の回は、授業の時間配分に気をつけます。②遠隔授業時、自分と学生の通信環境などを確認したうえで、オンデマンドかリアルタイムかを決めます。
対面とオンデマンド授業のハイブリット型で行うことで、対面では実践に集中して行わせることができた。学生のコメントにも、「チャンツや歌、ゲームなど、実際にやってみることで児童の姿を想像しやすかったです。オンラインではわからないような、クラスルームイングリッシュやスモールトークなどを実際に使って授業をやってみることができて、小学校での英語の授業についてよりリアルに想像することができました。」とあるように、対面は必須である。対面、遠隔の優位な点を大いに利用し、今後の授業の在り方について考えていきたい。
独自に工夫している点は、オンラインで教材等を先に提示し、それを予習して授業に臨むように指導し、反転授業的な要素を取り入れていること、またレポート等を２～３週間に一回は提出させて、必ずコメントを付して返却していること。また、返却に際しては、内容や形式において優れている学生レポートをコピーし、解答例として配布していること。アンケート結果については、問１および問２について、いずれも「強くそう思う」と「ややそう思う」を合わせると100%になる。解答率が40%程度なので判断が難しいが、学生に深く考えさせることや学習意欲向上が上手く行っているものと判断する。
教師側の視点・生徒側の視点で、単元の指導方法について考えさせています。「ロイロノートの使い方」を、学生ICT支援員に説明をお願いし、実際に学生に操作させています。ロイロノートを使用する授業を考えさせています。意欲的に取り組む学生が多く、それがアンケート結果に表れていると思っています。今年度も、学生が活発に活動できる授業にしたいと思っています。
3年生なので教育実習を意識させる授業をおこなっている。具体的には発表者を教師役、解答者を生徒役とするものである。発表者には板書も義務づけている。本年度で退任のため特筆すべきものはない。
講義ではコメントシートの活用、演習ではなるべく多くの受講生の意見を聞くことによって、一方通行の授業とならないよう工夫している。アンケートでは、コロナ感染が拡大している時期は遠隔授業にしてほしいという意見があった。遠隔授業にしても一定の学習効果が見込める科目については、臨機応変に対応していきたいと考えている。
特になし
中国語に関する関連情報を入れるようにしていたがこれは好評のようであった。「課題提出の際のコメントを見てもらえない」との声があったがこれはよくわからない。質問は作文提出時ないし、まなびネットの質問からするように指示し、そこに来たものについては回答しており、「質問についても対面と遜色なくできたので助かりました」とのコメントももらえているので恐らく指示外の手段による質問があったのではないかと思われる。授業方法についての指示をより明確にする必要がある。とはいえ遠隔のため質問しにくかった、発音を見てもらいたかったとの声もあり、やはり可能であれば語学は対面でする方が望ましいように思われる。今回は時間割的なこともありすべて遠隔での実施となったが、今後機会がある場合は可能な限り対面としたい。
It is important to further clarify learning goals for students, and to take steps to ensure those goals are both clearly outlined, and that the class structure is in place to help students achieve those goals.
授業方法については、特に人数の多い講義については、毎回（試験は除く）対面でもオンデマンドでも受講できるようにしている。アンケートではこの点を受けてだと思うが、受講しやすいという反応があったので引き続き今の形式を続けていきたい。改善点については、回答数が十分いなかったため、特に検討を要するものは見当たらなかったが、アンケート以外でも学生の反応をできるだけ聞きながら方法、内容ともベターなものを目指したい。

学生の主体的で深い学びに繋げるべく、アクティブラーニングを積極的に取り入れている。特に、授業前の下調べを多く課し、演習発表の場をできる限り設定しているつもりである。ただし、授業内容によっては、組み入れが難しい場合もあるので、バランスも配慮している。学生の要望をできるだけ考慮できたらとも考えている。 アンケートの結果は、今後の改善に役立てたい。ただ、調査人数が少なく、はっきりしないところもあるため、今後学生の反応を常に把握することも必要だと、改めて思った。 いずれにせよ、学生にとって有意義な時間だったと、毎時間思えるような授業方法を検討していきたい。
オンデマンド授業の動画資料では、教科書の画面と近いものを映し出して説明し、授業の進捗や説明の内容を把握しやすくしている。対面方式でも同様にしており、両方式の進め方のギャップが少ないようにしている。中国の基礎の学習に関しては、教員からの一方的な説明がほとんどになるため、学生たちの質問・要望などを受ける時間を設けた。学生たちにはそうした時間を積極的に活用してほしい。語学の発音習得については、オンデマンド方式では学生の努力・自主性にゆだねるしかなく、対面方式の際に発音の機会を増やすよう努めたい（感染状況からそれもしにくい時期があるが）。外国語の発音を正確に習得するには、ある程度の時間も必要になるので、1年間だけでなく長期的にねばり強く続けてほしい。
専門科目について：適宜、専門的なコンピューターソフトを用いて、視覚的に音声を理解するようにしたのは、今年度の授業の特徴だったと思います。一方、技能習得の要素が強い科目のため、新たな思考を展開するという内容が少ないのはしょうがないかと思います。教科内容について：今年度初めて担当し、自分の専門分野以外の個所を扱わないといけないことが非常に多かったため、授業準備が不十分なところがあったので、次回に同科目を担当することがあるのなら、その点に注意をして行いたいと思います。同時に、受講者の発表時間が長すぎることが多く他の活動ができなかったため、もう少し指導してもよかったと思います。